

ヨーロッパの人形劇について（第2報）

ベルギーの伝統的人形劇 — リエージュのチャンチェについて

増 谷 篤 子

1. はじめに

ベルギーは国土面積が約3万km²と日本の12分の1にも満たない小国で、フランス語圏とフラマン語圏の2つのパートに分かれており、人形劇が非常に盛んな国である。

ベルギーの首都ブリュッセルの旧市街の中心グランプラス広場の北東側に、〈聖なる島〉の意味を表すイロ・サクレ地区 Ilot Sacré がある。レストランがひしめく賑やかな肉屋通りにある狭い路地 Petite rue de Bouchers の突き当たりに、トーヌ人形劇場〈THEATRE TOONE〉は小屋を構えている。ここで始めてベルギーの伝統的人形劇（主人公はワルチェ Woltje、小さなワロン人 le petit Wallon の意）を見てから10年余りが経つが、その後、リエージュにチャンチェ Tchantchè、ゲントにペルケ Pierke、そして、アントワープに De Neus を主人公にした伝統的な人形劇が存在することが分り、現地で実態調査を始めた。

平成2年度に、夙川学院短期大学学術振興委員会の助成を得て、1990年8月～9月および1991年2月にベルギー各地で行った調査を中心に、ベルギーの伝統的人形劇（吊り下げ式）棒操りの起源と変遷および現在の人形劇場の実態のうち、今回はリエージュのチャンチェ Tchantchè についての調査、研究結果を報告する。

尚、人形劇を分類するとき、ベルギーの伝統的人形劇を、英語では人形を吊り下げて上方から操るといふことで、糸操り〈marionette〉の中に含んでいるが、フランス語では、第1報で報告したように、糸操りを〈Les marionnettes à fils〉、棒操りを〈Les marionnettes à tiges〉（インドネシアの西ジャワを中心に演じられているワヤン・ゴレックや、西ドイツのケルンの人形劇場〈Kölner Hännischen Theater〉のように2メートル以上ある棒で人形を下から操るものまで、人形の頭部および胴体を下方から支えて、両手を棒で操るもの全般を指す）、と〈Les marionnettes à tringle〉（シシリー島のオペラ・デ・ブビ、北フランスのアミアン、ベルギーのリエージュ、ブリュッセル等で演じられている上方から人形の頭部を鉄の棒で吊り下げものや、頭部を鉄の棒で吊り下げ、人形の右手を鉄の棒で、左手を糸で、そして両手を糸で操るものを指す）に分類しており、ここでは吊り下げ式の棒操りとして取り上げる。

2. 伝統的人形劇の背景とその発生

青銅器時代、ベルギーのあたりにはケルト語でベルガエ Belgae と呼ばれる民族が住んでいたが、これがベルギーの国名の起源とされており、その由来を説明するときによく引用されるのが紀元前1世紀に書かれたシーザーの『ガリア戦記』である。

ローマ皇帝のシーザーが、ガリア地方（現在のフランス、ベルギー）を転戦中に戦ったゲルマン民族の中にベルガエという部族があり、シーザーはこの部族について、「敵ながらきわめて勇敢であり、よく戦う」と自らの戦記の中で誉めている。紀元前57年にシーザーがベルガエ人を征服した後、南部ワロンはローマ帝国の植民地としてラテン化し、北部フラマンはゲルマン的な性格を持ち続けた。

ベルギー北部に広がるフランドル地方は、アントワープ、アントワープ、ブルージュに代表されるように、織物工業や海運業で早くから栄えた都市を持ち、富裕な市民階級が同業組合(ギルド)を作って封建諸侯と対決し強力な自治都市を築き上げてきた。この地方には、オランダ語の古い会話体であると言われるフラマン語を話すゲルマン系のフラマン人が住んでいる。

また、ベルギー国土の3分の1を占め、ゆるやかな丘陵とミューズ川とその支流沿いの溪谷と、森、林、牧草地といった変化に富んだ牧歌的な風景が広がる南部のワロン地方は、ナミュール、リエージュ、モンス、トゥールネイといった都市に代表され、フランス語とラテン系のワロン語を話すワロン人が住んでいる。

この2つの言語はベルギーが1830年にオランダから独立した後、現在に至るまで、ベルギーの言語戦争と呼ばれる両民族の対立、そしてこれに伴う政治危機を引き起こしてきたが、ゲルマンとラテンの文化が巧みに調和している。

ヨーロッパ文明の源泉たるキリスト教が人々の生活に深く根をはるこの小さな国の中で、シチリアやナポリのマリオネット、オペラ・デ・プピに非常によく似たあやつり人形劇がリエージュ、ブリュッセル、アントワープ、トゥールネイで始まったのは1820~60年頃で、その後ベルギー各地で発展し今日に至っている。

ベルギーの東部に位置し、丘陵地に囲まれ、ミューズ川 La Meuse とその支流ウールト川 L'ourthe に抱かれた町リエージュ Liège は、古くからヨーロッパ各地の交易の中継地としてその名を馳せた西ヨーロッパの十字路である。また、中・近世においては欧州屈指の鉄砲の生産地として知られ、フランス語圏ワロン（南部）の中心地で、かつては強大な司教領都市として隆盛をきわめた宗教都市であった。そしてここにベルギーの伝統的人形劇の中でも最もシンプルな吊り下げ式棒操りが19世紀半ばに出現した。

リエージュで最初に人形劇が演じられた記録が残っているのは1664年春である。ジェノヴァ生まれのアントニオ・デヴォト Antonio Devoto は、復活祭の祭りの間、人形劇を上演する許可を受け取った。ただし、人形劇が礼拝の後に上演され、そしてスキヤングラスでないという

増谷：ヨーロッパの人形劇について（第2報）

条件であった。勿論、デヴォトはリエージュの大衆にあやつり人形を上演したただ一人のイタリア人ではなく、彼以外にも数多くの人形遣い達がこの町を通り過ぎて行ったに違いなかった。その後1736年12月19日、リエージュの市議会は冬の間中、ジルベール・ブールゲ Gilbert Bourguet に町で人形劇を上演する許可を与えた。また、1776年11月18日君主兼司教（プリンス・ビショップ）はシャルル・ペリコ Charles Perico に、取消があるまで人形劇を上演することを正式に認可した。¹⁾

アンシャンレジーム *Ancient régime* の終わり頃、5月1日の聖バルビン Saint Balbine の祭りの日には軍隊のパレードを見るため多くの群衆が城砦に登り、彼女を礼拝するために聖人の名をとって命名された地区に下りていった。飾られたテントの中で、民衆は卵や揚げたソーセージを食べビールを飲んだ。そして、周辺では吟遊詩人や大道芸人などあらゆる見世物が出て、人形劇も演じられた。しかし、どの地方も他の大道芸と同じように人形劇を禁止し、正式な行政手続きによれば上演は認められなかった。²⁾

人形劇は当然子供たちのために上演されたが、大人たちも同席し大いに楽しんだ。このことをよく理解していたヴェルヴィエール Vervier の市長は、1810年11月に子供のための人形劇を演じてくれる人形遣いを募った。市長は1812年8月に、既にケルンやジュネーヴに住んだことのある Lixhe 村に住むジャン・ジャック・ノエ Jean-Jacques Noé から上演願いを受け取った。ノエは県中で上演することを希望し、人形遣いが彼のただ一つの職業であること、そして県内の多くの村長達が何の理由も説明せずに、彼に大衆のために人形劇を上演することを禁止したことについて説明した。³⁾

「中世後期に典礼劇や奇蹟劇がさかんになると、人形遣いも時勢にならってこうした宗教的主題を芝居にとりあげようとした。はじめは教会の中庭でやり、やがて街角や演芸場でも公演した。かれらは依然として旅まわりの芸人で、人形を入れた小さな箱を背負って歩き、その箱がそのまま舞台になった。人形は機械仕掛けで操作され、人形劇役者は舞台の前に立って人形が演じている物語を語りきかせた。まもなく行政当局はこうした芸人連中にも統制を加えるようになり、人形遣いは市役所に上演許可を申請しなければならなくなった。許可には多くの制約がともない特別の条件が列挙されていた。すなわち、日曜日の礼拝中に上演すべからず、日没後も禁止、騒音をたてるべからず、大騒ぎするべからず、などなどだった。もしも、これらの条件を守らないと許可はとり消され、二度と認可されなかった。…役者や人形遣いが特別な許可なしで公演できるところが一つだけあったが、それは市の立つ場所であった。」⁴⁾これが16世紀から18世紀にかけての人形遣いのヨーロッパでの状況であったが、ノエのケースからリエージュの当時の様子を伺い知ることが出来る。

19世紀末から20世紀初頭にかけて、リエージュで大変人気のあった人形遣いタルボ Talbot とその妻は小さな野外劇場を持ち、日曜日と木曜日の2時と5時に約45分間のショーを子供の観客に対して上演した。筋はいつも同じで、癩癩持ちのパンチが酔っぱらって帰って来て彼の相

棒ジュディと議論する。彼女は気難しい正面の黒い顔と、ニコニコした白い顔を後ろに持っていた。パンチはいつも、結局最後には、彼女を両手に挟んだこん棒でこてんこてんにやっつけた。すると突然に、もったいぶった態度で警察署長がちょっと立ち寄り、時折り黒い犬が舞台に現れ、白いガウンの人食い鬼〈Cacafougn〉が舞い上がってあやつり人形小屋の小さな観客たちを恐怖におののかせた。⁵⁾

これはアンシャン・レジームの間に公然と上演された只一つの人形劇場であったが、人形遣いの3本の指で操られる指人形劇であって、リエージュの伝統的人形劇とは異なっていた。伝統的人形劇は、19世紀半ば以前はリエージュでは知られていなかった。

リエージュで初めて吊り下げ式棒操りが演じられた記録が残っているのは、1850年のことである。1850年9月23日、リエージュ市の警官はスーレ通り rue Surlet で2つのマリオネットにダンスをさせ始めた不法の身分証明書を携帯している外国人を逮捕した。彼の名はアントワーヌ・エンゲロッチィ Antoine Engelotti で、イタリアのベドニア Bedonia 生まれで50歳であった。1840年から1865年までのリエージュ市の公文書を調べた結果、1850年9月24日付のこの警官の報告書只一つだけが、職業を〈あやつり人形師〉として取り扱っている。そして、その報告書は彼がダンスさせたことを明確に指摘している。これは棒でぶら下げたりエージュの伝統的な人形劇が歴史に名を留める最初の出現である。もしそうでなければ〈ダンス〉という言葉の使用は不可解である。⁶⁾

リエージュのウートル・ミューズ地区の最初のマリオネット劇場は、1854年に到来したイタリア人によって始められた。彼の名前はアレキサンドル・コンティ Alexandre Conti、1830年12月12日生まれの24歳でトスカーナのカステル・ベッキオ Castel-Vecchio 地区のバルガ Barga 出身であった。彼はその地方からの他の多くの移民と同様に石膏像製作者（彫刻家）で左岸に住んでいた。〈di mon Con'ti〉と呼ばれたマリオネットたちは、同じように人口の多い地区に模倣者たちを生み出し、模倣者たちはリエージュ市内の他の地区と郊外に劇場を建てた。創設者コンティは右岸に移動する前に、近所の職人ジル・エンネ Gilles Henne に彼の劇場を委ね、ジルは〈Dgîle Con'ti〉の名のもとに劇場を続けた。そして、1903年コンティはリエージュでその生涯を閉じた。⁷⁾

エリゼ・レグロ Elisée Legros は、〈引っ繰り返された皇帝達がいた〉というコンティのマリオネットについて論じられた1860年の短いワロンの作品を発見した。⁸⁾

そして、およそ四分の一世紀後の1888年に作家のデュドンネ・サルム Dieudonné Salme は、地方小説“Li houlot”(末っ子)の第6章で、ウールトミューズのプティ・ベッシェ通り rue Petite-Bêche のコンティの劇場の最初の興行について〈Lès marionètes èmon Con'ti〉という題で描写した。⁹⁾

このようにして始まったリエージュの吊り下げ式棒操りは、工業化する社会の真只中で、都市の労働者階級の人々の間に定着し長い間親しまれた。それは子供のための人形劇ではなく、

増谷：ヨーロッパの人形劇について（第2報）

特にリエージュでは、大人も子供も含めた当時の労働者たちのレジャーの一つであったことは明らかである。そして、20世紀初頭には、マリオネット劇場はワートル・ミューズ地区に約20の小劇場と、リエージュとその近郊に合計して50以上を数えた。

それらのマリオネット劇場は《Théâtre du Château Fort》《Théâtre de l' Aigle d'Or》《Théâtre de l'Empire》《Théâtre Impérial des Grandes Marionnett》《Théâtre des Variétés》《Théâtre du Vantour blanc》《Théâtre de la Gaieté populaire》等であった。

3. 伝統的人形劇のレパートリーについて

リエージュの伝統的人形劇のレパートリーとして、先ず聖書からテーマをとった聖史劇と散文体で書かれた中世英雄物語を土台にした、ヒロイックでロマンティックな騎士物語が上げられる。聖史劇は『キリスト降誕の物語 Li Naissance』『キリスト受難劇 La Passion』、そして、『聖アントワヌの誘惑 Tentation de St-Antoine』などで、『Li Naissance』がクリスマスの時期に、復活祭の期間に『La Passion』が盛んに演じられている。

また、騎士物語は11～14世紀に完成された詩の形で「武勲詩」と呼ばれ、キリスト教騎士たちの勲功が称賛されている。「武勲」には幾つかのシリーズがあるが、一番人気があったのは、シャルルマーニュ Charlemagne 大帝とその騎士たちに捧げられたものであった。シャルルマーニュ大帝は絶対的に理想化され、「武勲詩」の中では偉大、聡明、正義、善の栄光に包まれていた。『ローランの歌 La Chanson de Roland』は、1098～1100年頃作られたフランスの武勲詩で、778年シャルルマーニュ大帝スペイン遠征の帰途、後衛部隊がバスク人におそわれて絶滅した史実に題材をとり、十字軍と異教徒の戦いに置き換えたもので、聖騎士ローランが義父ガヌロンの裏切りのためロンスポーの谷間で最期を遂げる物語を、単純で統一ある構成で語っている叙事詩で、最古の傑作といわれている。

しかし、伝統的人形劇場で演じられた騎士劇は、大半が1869年、アルフレド・デルヴォ Alfred Delvau 出版の「青本」〈Bibliothèque bleue〉を基にしていた。¹⁰⁾

17世紀、18世紀のフランスでは、質の悪い紙に刷られ、棒砂糖の包装用に使われたような青い紙で製本されていたことから〈Bibliothèque bleue〉「青本」という名で呼ばれた¹¹⁾小冊子は、様々な古代叙事詩や武勲詩を混合し、『ガリアのアマデイス Amadis de Gaule』のような作家風の文体に書き直したもので、伝統的な刊行本の価値を減らす叙事詩の膨大なコレクションを一般民衆に提供した行商本であった。それらは『エイモンの4人の息子 Les Quatre Fils Aymon』『オルソンとヴァレンタイン Orsone et Valentin』『ガリアのアマデイス Amadis de Gaule』『ローランの死 La mort de Roland』『デーンのオジェ Ogier le Danois』『プロヴァンスのピエール Histoire de Pierre Provence et de la belle Maguelonne』『ボルドーのユオン Huon de Bordeaux』などであった。

それから、歴史小説『フランドルのライオン Lion de Flandre』やアレキサンドル・デュマ

Alexandre Dumas 作の騎士任侠物語である『三銃士 Les Trois Mousquetaires』は、続き物の形で挿話が演じられ何回にも分けて上演された。しかし、それ以外にも、滑稽なオペラ『ミニヨン Mignon』や『ファウスト Faust』『ドン・ジュアン Don Juan』、民間伝承を題材とした『眠り姫 Geneviève de Brabant』『赤頭巾 Le petit chaperon rouge』『長靴を履いた猫 Le Chat botté』『親指太郎 Le petit poucet』『青髭 Barbe-bleue』や『シンデレラ Cendrillon』また、『アラビアン・ナイト』の『アリババ Ali-Baba』や『アラジン Aladin』、口承によって伝えられた超自然的な物語『聖ヘレナの花 La Fleur de sainte Hélène』や滑稽で幻想的な物語『L'Os qui chante』『せむし Le Bossu』のようなメロドラマ、あるいは、本物の劇の翻案や笑劇、そして、ワロンの劇から借用した一編『Tati L'periqué』やワロン風に書かれたレパートリーなど非常に多彩である。¹¹⁾そして、それらは明らかにワロンの劇か、あるいは面白い寓話を除いて、マリオネット劇場では通常フランス語で演じられる。

4. チャンチェの名の起源とその人物像

チャンチェは、ワロン地方の大変ありふれたファースト・ネーム〈Françwès〉でフランス語のフランソワ(François)が変形したものである。当時、リエージュの土着の形が〈Françêus〉であったにもかかわらず、フランス語の〈François〉から借用されて、その音は〈oi〉と書かれたが〈wè〉と発音された。それは幼児が〈Djôsef〉を〈Dèdè〉と子供らしい重複音に変えて発音するのに類似している。そして、一つの形が他の形に置き換えられることは17世紀の間に起こった。チャンチェという名前は1800年以前には書き留められていない。¹²⁾

ひだのついたブルーのスモックを着て、接ぎをしたズボンを履き、黒い帽子を被ったチャンチェは、素朴な男一農夫を表現している。彼は駄洒落に富んだ頭音転換(頭字の置き換え)のワロン語、あるいは地方のフランス語(リエージュの方言)で、彼の常識的な考えや劇がどんな風に終わるかについて述べるリアルな人物である。¹³⁾

チャンチェはいつも欠点のない、感じのよい人物として登場しない。彼は食いしん坊で、喧嘩好きで、怠け者で、女嫌いである。彼は誰でも笑い物にするが、心の温かい真に優しい人物で、彼の人生の特別な楽しみである熱意と悪意の両方を観客に伝えた。¹⁴⁾

チャンチェの劇中に於ける役割は観客に劇の筋を知らせ、観客の傾聴に対して感謝を表わし次の芝居を告げ、そして騒がしい言いぐさを叱りつけ観客を楽しませる冗談を言う。また、チャンチェはシャルルマーニュ大帝に任命された使者であり、一騎討ちや戦闘が終わった時に死者を取り除く。さらに、正しいフランス語がシャルルマーニュ大帝、エイモンの4人の息子たち、ローラン、あるいはキリストの降誕を告げる天使等によって話されている間に、道化者チャンチェはリエージュの方言で自分の言い分を述べる。チャンチェはレパートリーの中で、只一つの真に現実的な要素であり、彼なしでは中世の叙事詩は始めから終わりまで退屈だっただろうし、パフォーマンスの劇的な面白味を半減しただろう。このように、彼は彼の役割の性

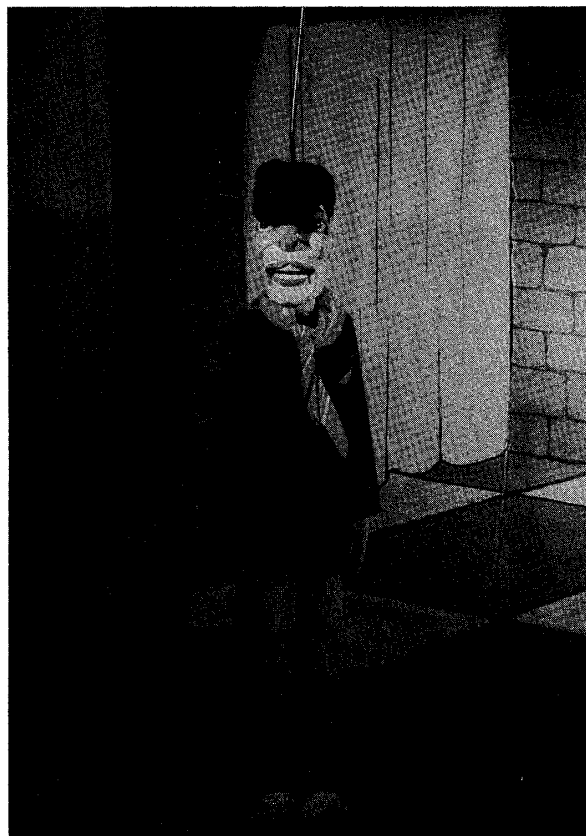
増谷：ヨーロッパの人形劇について（第2報）

質によって、他の登場人物をその対照で引き立たせるのである。しかしこの役割はチャンチェに思いがけない発展をもたらし、彼を彼の仲間（人形劇場には、当然、チャンチェ以外にも道化役たちが存在した。）のシンボルにした。なぜなら、彼は普通の人の役割を演じ、欠点と特性で一般民衆を具体化したのだった。彼は飾り気のない態度と良識、貧困と苦難で、民衆のシンボルになり理想化された。¹⁵⁾

(チャンチェ Tchanchès)



《Théâtre Al Botroule》筆者撮影



《Théâtre Musée de la Vie Wallonne》筆者撮影

チャンチェは苦難にあっても常に愉快的なユーモアに溢れ、報復の可能性を秘め、そして支配者たちを笑い物にした。チャンチェはベツレヘムの馬小屋からシャルルマーニュ大帝の宮殿に至るまで、どこでも、どの地域でも、どんな状況でもいつもからかっており、感傷的で独立心のあるワロン人であることを決して止めなかった。¹⁶⁾

彼はいつも顔を上げ、機知にとんだ言葉と痛烈な嘲りで、労働者の性格をさらけ出すのであった。19世紀の終わり頃、ワロン地方には民族主義の気運が高まりワロン議会が設立されたが、ワロン人の精神を具体化し象徴するシンボルとなる人物としてチャンチェが選ばれた。

チャンチェは、それ以後マリオネット劇場のカリカチュアであることを止め、彼の人間的な特性は高められ彼の名声は高まっていった。そしてジャーナリズムのみならず広告、さらに宣

伝活動は絶えず彼を利用した。彼は同時代の政治の舞台で時事漫画にひんばんに登場するようになった。¹⁷⁾

1936年、J.ゾメル J.Zomers によって彼の彫像はウートル・ミュージズに建てられた。そして1947年に誕生した博物館 Musée Tchantchès に彼の名前が捧げられた。

今日、彼の性格はもっと現実的になり象徴主義的ではなくなったが彼の人気は変わらない。このような不思議で非凡な運命の中で、この小さなあやつり人形は道化役者として生まれ、そして一世紀も立たないうちに地域社会全体の良心を代表するようになったのである。

(チャンチェ Tchantchès)



《Théâtre Royal Ancien-Imperial》筆者撮影

(J.ゾメル作のチャンチェの彫像)



筆者撮影

5. リエージュの吊り下げ式棒操りの形態と演技方

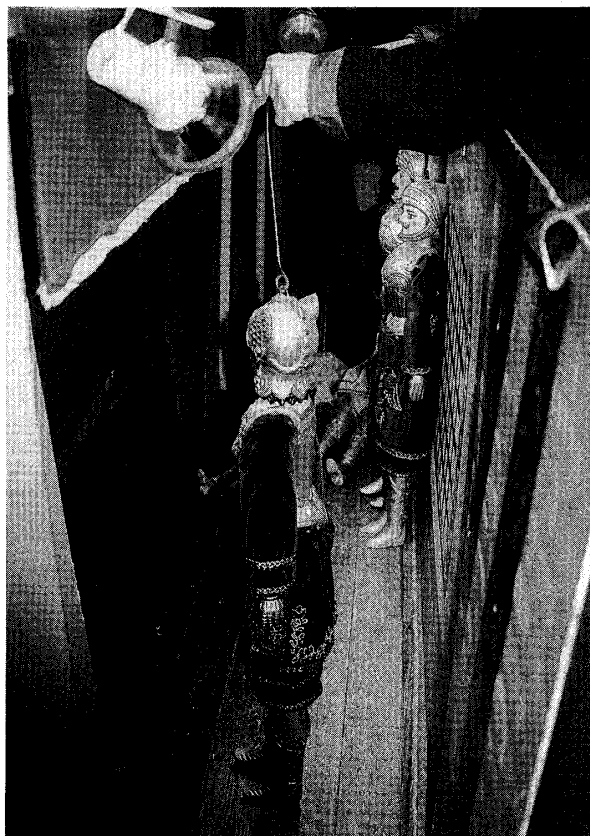
リエージュの吊り下げ式棒操りの特徴は、一言でいえば、そのシンプルさにあると言える。人形は木を彫ったもので、頭部の髪や口、眼は木に直接描かれており、膝や肘の関節が曲がるように作られ、様式化された騎士衣裳を着ているが、頭に取り付けられた金属の棒1本があるだけである。形態はイタリアのオペラ・デ・プピに非常に似ている。(オペラ・デ・プピでは剣を持った人形の右手を鉄の棒で楯を持った左手を糸で操るため、甲冑は様式化されず、非常に

増谷：ヨーロッパの人形劇について（第2報）

リアルに作られているが、シチリア東部にはリエージュと同じく一本の金属の棒で吊り下げられたマリオンネットが存在する。¹⁸⁾この金属の棒は人形の顔を水平に動かしたり、下を向いて頷かせて話している人物を教えるが、手足はただぶら下がっているだけでそれら进行操作するための棒や糸はない。歩行はただ人形を金属の棒で吊り下げ、左右あるいは前後に移動させるだけである。

一騎討ちや両軍の合戦は、人形遣いが両手に人形を5体ずつ持ちぶつからせるだけである。合戦のたびに端にいる人形が1体ずつ落とされてゆき、戦いは両軍の首領だけになるまで続き、舞台には戦闘で倒れた人形がうず高く横たわってゆく。そして人形遣いがその棒を手放した時人形はその命を失う。また集会のシーンで多数の人形が登場する時は、台詞の無い人形たちは棒に引っかけられて吊り下げられている。

（吊り下げ式棒操りの操り方）



（シャルルマーニュ大帝）



〈Théâtre Royal Ancien-Impérial〉筆者撮影

このようにリエージュの騎士劇では、あやつり人形の生命は話すこと、歩くこと、戦うこと、そして死ぬことという4つの異なった活動に要約される。パフォーマンスにはシャルルマーニュ大帝と彼の貴族の王立会議の集会、太鼓の轟きと共に行われる軍隊の行進と、しばしば一騎討ちで終わる戦闘という3つの要素が常に含まれている。そしてどの話であれ必ずヒーロー

ーチャンチェが登場する。人形の演じ方は、通常メインの人形遣いが人形を操り、登場人物全員の台詞を一人で演じるが、彼の助手（一人か二人いる）が、人形を操るのを補助し、舞台装置を変えたり、幕間に背景を動かす。また彼らは兵隊達の行進のマーチと戦闘シーンのブリキの太鼓を叩く。背景は布のキャンバスに描かれており物語の進行とともに変わってゆく。人形の大きさはその寸法と地位の法則が守られているため、劇場にもよるが、例えばシャルルマニュ大帝が最も大きく1m05cm、国王90cm～1m、王妃、王女、騎士たちが、85cm、兵隊60cm、そしてヒーローのチャンチェとその仲間ナネッセ Nanèsse が65cmという具合である。

6. 現在のリエージュの人形劇場の実態について

現在、リエージュ市内にはミューズ川の右岸と左岸に、定期的に伝統的人形劇を上演している3つの人形劇場がある。規模も雰囲気も違うが、主人公がチャンチェであることに変わりはない。

《Théâtre Royal Ancien-impérial》

ミューズ川とその支流ウールト川の間に挟まれた右岸のウールトミューズのチャンチェ発祥の地に、テアトル・ローヤル・アンシアン・インペリア Théâtre Royal Ancien-impérial は小屋を構えている。内部はパブと人形劇場、そして人形劇の主人公チャンチェや騎士たちのマリオネットが集められた博物館 Musée Tchantchès になっており、9月から復活祭までの間の毎日曜日の10時30分と10月から復活祭までの水曜日の14時30分の週2回、騎士劇を中心に上演している。

レパートリーは、『ロメオとジュリエット Romeo et Juliette』『キリスト降誕の物語 Li Naissance』『ファウストとマルガリータ Faust et Marguerite』等である。

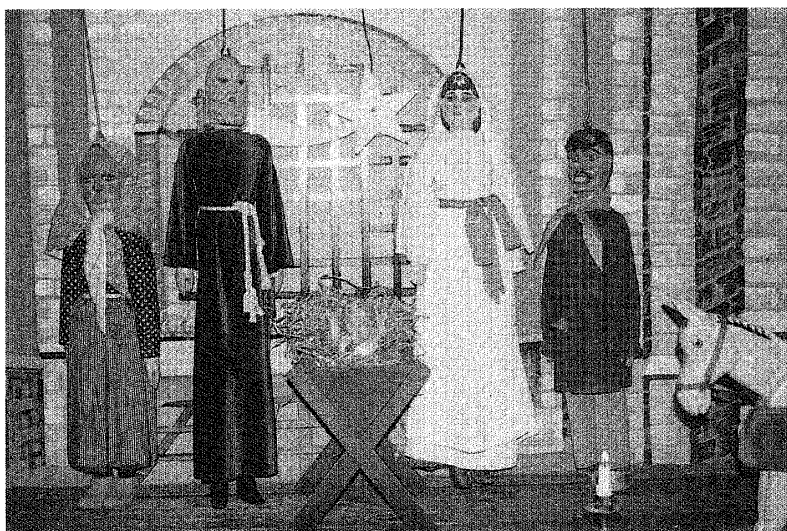
《Théâtre Musée de la Vie Wallonne》

旧市街の中心地に17世紀のフランシスコ会修道院であったワロン民族博物館がある。ワロン圏の民俗、文化、歴史にかかわる生活用具やチャンチェをはじめベルギーの伝統的な人形劇の主人公たちが集められているが、ここにワロン民族博物館主宰の人形劇場がある。

興行期間は12月中旬から復活祭までの間、火曜日の14時30分と日曜日の10時30分の週2回で、子供のために騎士劇を中心に伝統的人形劇を上演している。

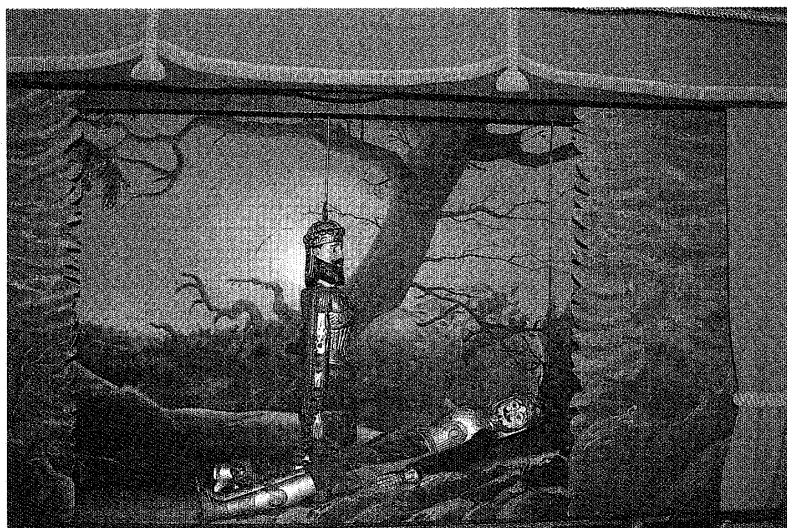
レパートリーは『キリスト降誕の物語 Li Naissance』『キリスト受難劇 La Passion』『エイモンの4人の息子 Les Quatre fils Aymon』『デーンのオジェ Ogier le Danois』『ボルドーのエオン Huon de Bordeaux』『ロビン・フッド Robin des Bois』等である。

増谷：ヨーロッパの人形劇について（第2報）



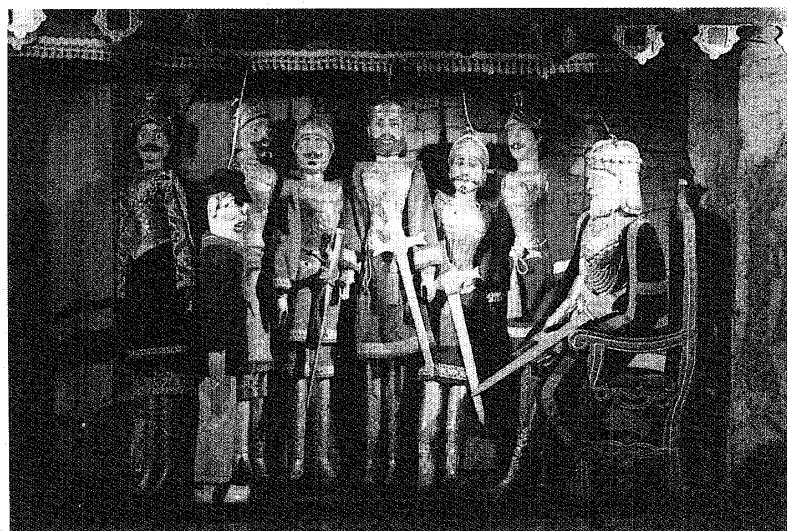
『キリスト降誕の物語』
(Li Naissance)
の1場面

《Théâtre Royal Ancien-impérial》筆者撮影



『ローランの歌』
(La Chanson de Roland)
の1場面

《Le Théâtre Al Botroule》筆者撮影



『騎士物語』の1場面
チャンチェと
シャルルマーニュと
その騎士たち

《Théâtre Musée de la Vie Wallonne》筆者撮影

《Théâtre Al Botroule》

旧市街の中心地サン・ランベール広場から急な坂道を登ったサン・セヴァラン地区に、1973年4月13日の金曜日にオープンしたジャック・アンション Jacques Ancion と妻フランソワーズ Façoise が主宰するテアトル・アル・ボトゥルイエ Théâtre Al Botroule は、50席余りの小さな劇場である。かつて日本にも来たことがある2人は、自宅を人形劇場とするリエージュ唯一のプロフェッショナルの人形遣いである。興行期間は10月から5月末まで、通常水曜日の16時30分と土曜日の14時30分と20時30分の週3回で、子供ばかりでなく大人のための伝統的人形劇を上演している。

レパートリーは『キリスト降誕の物語 Li Naissance』『キリスト受難劇 La Passion』『ローランの歌 La Chanson de Roland』『ローランの死 La mort de Roland』『Tati L'pèriquû』『ファウスト Johannes Doctor Faust』『L'Os qui chante』『悪魔の釜 La Marmite Du Diable』やA.ジャリィ Alfred Jarry の戯曲『Ubu Cocu』等である。

また、リエージュでは、毎年8月15日の聖母マリアの被昇天祭の日にはウールトミューズ地区の Théâtre de la Place で、《Théâtre de La Cave》が子供たちのためにチャンチェを主人公にした人形劇を上演している。

7. おわりに

リエージュの伝統的人形劇（騎士劇）の起源については、シチリアやナポリのオペラ・デ・プピと類似していることや、創始者コンティがイタリア人であったことからそのルーツがイタリアであるという説が有力であるが、モーリス・ピロン Maurice Piron は、*Histoire du célèbre théâtre liégeois de marionnettes* の著者であるルドルフ・テウ・ワルサージュ Rodolphe de Warsage について次のように記述している。

「今世紀初頭、法律家で古典学者のワルサージュは、有名なりエージュの劇場の歴史を書くことを引き受けた。彼はリエージュのマリオネットの起源を、劇中の登場人物の描写、騎士道の取り扱いからカロリング朝の時代に遡るに違いないと信じていた。彼はリエージュの旧公国が、主要な叙事詩に登場する英雄たちに取り巻かれた指導者の発祥の地であることを考慮すればより自然である」と言った。¹⁹⁾

これはリエージュが傑出した支配者シャルルマーニュ大帝の発祥の地であり、騎士劇に常にシャルルマーニュ大帝が登場する事実から、ワルサージュの説が尤もであるように思えるがはっきりした確証はない。シャルルマーニュ大帝が聖都としたアーヘン Aachen にも、リエージュの伝統的人形劇に非常によく似たマリオネットがある²⁰⁾ということだが、そこから新たな手掛かりが得られるかもしれない。

19世紀半ばに、リエージュに誕生した伝統的人形劇の主人公チャンチェのキャラクターの多

くの要素はイタリアのプルチネッラに似ているが、プルチネッラの模倣ではない。前記のようにチャンチェは赤ら顔の素朴な男一農夫を表わし、食いしん坊で、喧嘩好きで、怠け者で、女嫌いであり、誰でも笑い物にするが、心の温かな真に優しい人物である。そしてどんな困難な状況にあっても常に愉快的ユーモアに溢れ、報復の可能性を秘め、支配者たちを笑い物にしてマリオネット劇場で絶大なる人気を博した。チャンチェは後に人形劇のヒーローを越えてワロン・のシンボルにまでなるが、一般民衆の集合体であり、理想化された典型を常に演じ続けている。

20世紀初頭には、リエージュ市内に20以上もあった人形劇場も、第1次世界大戦後の映画、第2次世界大戦後のテレビに多くの観客を奪われてその数も減り、衰退の危機も感じられなくもないが、それでもまだ、チャンチェはマリオネット劇場の中では変わらぬ人気者である。ただ昔も今も人形遣いたちが《Théâtre Al Botroule》を除いて、プロではなくアマチュアで、専業の仕事を持ちながら興行していることは少しも変わっていないが。

どの小屋を訪れても「チャンチェ！ チャンチェ！」と叫ぶ子供たちの歓声は、チャンチェが現在も元気に活躍していることを感じさせてくれるし、同席している大人たちもまだ多いが、伝統芸能が廃れつつある現代社会の中で、チャンチェの今後の頑張りに期待したいものである。

註

- 1) Maurice Piron and Jean Fraikin *TRADITIONAL MARIONETTE THEATRE FROM LIEGE*, Liège, OFFICE DU TOURISME LIEGE, 1980,p.12.
- 2) loc.cit.
- 3) ibid.,p.13.
- 4) ヘンリク・ユルコフスキ (加藤暁子訳) 『知的冒険としての人形劇場』新樹社 1990年。
p.156～p.157.
- 5) Maurice Piron and Jean Fraikin,op.cit.,p.13.
- 6) loc.cit.,p.13-14.
- 7) Maurice Piron *Tchanches HISTOIRE D' UN TYPE POPULAIRE*, Liège, Editions Libro-Sciences,1988,p.22.
- 8) Maurice Piron and Jean Fraikin,op.cit.,p.15.
- 9) MUSEE DE LA VIE WALLONNE *LES MARIONNETTES LIEGEISES ET "TCHANCHES"*, Liège, MUSEE DE LA VIE WALLONNE,1965,p.4-5.
- 10) ピーター・バーク (中村賢二郎／谷 泰訳) 『ヨーロッパの民衆文化』人文書院 1988年 p.330.
- 11) Maurice Piron,op.cit.,p.13-15.
- 12) Maurice Piron and Jean Fraikin,op.cit.p.18.
- 13) loc.cit.
- 14) loc.cit.

- 15) *ibid.*,p.10.
- 16) *ibid.*,p.11.
- 17) *ibid.*,p.19.
- 18) 川尻泰司 『日本人形劇発達史・考』 晩成書房 1986年。 p.179.
- 19) Maurice Firon and Jean Praikin, *op.cit.* p.14.
- 20) Ann Hogarth & Jan Bussell *FANFARE FOR PUPPETS!*, London, David & Charles I-nc., 1972. p.99-102.

参考文献

- 川尻泰司 『日本人形劇発達史・考』 晩成書房 1986年。
- 南江治郎 『人形劇入門』 保育社 1969年。
- エリザヴェータ・コーレンベルグ（大井数雄訳）『人形劇の歴史』 晩成書房 1990年。
- コンスタン・ミック（梁木靖弘訳）『コメディア・テラルテ』 未来社 1987年。
- ヘンリク・ユルコフスキ（加藤暁子訳）『知的冒険としての人形劇場』 新樹社 1990年。
- ピーター・バーク（中村賢二郎／谷 泰訳）『ヨーロッパの民衆文化』 人文書院 1988年。
- Paul Fournel, *Les marionnettes*, Paris, Bordas, 1982.
- Ann Hogarth & Jan Bussell *FANFARE FOR PUPPETS!*, London, David & Charles Inc, 1972.
- Maurice Piron *Tchanches HISTOIRE D'UN TYPE POPULAIRE*, Liège, Editions Libro-Sciences, 1988.
- Maurice Piron and Jean Fraikin *TRADITIONAL MARIONETTE THEATRE FROM LIEGE*, Liège, OFFICE DU TOURISME LIEGE, 1980.
- MUSEE DE LA VIE WALLONNE *LES MARIONNETTES LIEGEISES ET "TCHANCHES"*, Liège, M-USEE DE LA VIE WALLONNE, 1965.
- René Simmen, *Le monde des marionnettes*, Zürich, Editions Sliva, 1972.
- Yves Coumans, Françoise Flabat, Francis Houtteman *MARIONNETTES ET THEATRES DE MARIONNETTES EN BELGIQUE*, Bruxelles, 1983.